2020.3.25

大草

読書メモ

126.深作光貞「日本人の笑い」玉川大学出版部（1977.5））

127.鷲田清一「だれのための仕事」講談社（2011.12）

128.武田晴人「仕事と日本人」筑摩書房（2008.1）

129.樺俊雄「現代における人間疎外」未来社（1969.12）

**＜深作光貞「日本人の笑い」から＞**

　この本は、日本人の笑いを欧米人と比較してその違いを分析したものである。

・日本式の笑い・・・音のある笑い

　大笑いに対する目に見えない規制は、日本独特のものであると著者はいう。本当は笑いが好きな日本人が、なぜ笑いに対して意識過剰気味で、笑いにブレーキをかけるのか？について著者は以下の理由を挙げている。

①笑いには、傍若無人性、残酷性、共犯性などの他人を傷つける要素がある。

②笑う理由や内容が分からない第三者は、そばで笑われると一種の被害妄想的な不安感、不快感に襲われやすい。

③笑いが共同体の協調を損なう恐れがある。

・日本人は長く笑い続けることは、一方では教養のないこと、他方で他人に失礼なことと考えている。それで、笑いをやめ、すぐしゃべろうとすると、笑いと言語が混成してしまう。（欧米人には、笑うときには笑って、wellと言って切り替えを完全にしてから話すので混成は起こらない。特に日本人女性のフフフ、ホホホなどは混成により起こる。）

・欧米人は、サロンなど笑ってよい場所では大声で笑う。しかし、待合室などでは知らない人に配慮して大げさな笑いはエチケットとして慎む。ところが、日本人は、笑って構わない室内とそうでない場を区別することなく、「他人さま」の前では、よそ行きのエチケット笑いをしようとする。

・日本式の笑い・・・音のない笑い

　音のない笑いには、「ニコッ」「ニコニコ」、「ニヤッ」「ニヤニヤ」、「ニタッ」「ニタニタ」笑いがある。これらは、微笑やエチケット笑いとして、世界のどこにでもある。

・しかし、日本人特有の自己防衛としての「ヘラヘラ笑い」は、相手に太刀打ちできない場合に媚びて行う笑いであるという。宿題をやらなかった学生が教師の前で頭を掻きつつヘラヘラ笑う、教師はそれを見て叱り、学生は緊張に急変する、これらは親しみを示すものとして是とされている。最初から学生が、緊張の表情をすると教師と対決するような印象をあたえてしまうので否とされる。（大草：これは甘えの構造では？）

・しかし、このヘラヘラ笑いは欧米人には通用しない。宿題をしてこなかったことは契約違反とみなされ、学生に弁解の余地はなく、笑うことはもっての他と解される。

・日本社会は、論理と情や気分の人間関係の二重構造となっており、情や人間関係の方が重んじられる。このためヘラヘラ笑いで「やましさを感じている」ことを示し、叱られて緊張することで教師の機嫌取りに成功している。日本だからこそ通用するヘラヘラ笑いである。

・微笑とエチケット笑い

　欧米人は、ニコッと「エチケット笑い」をして握手しにくる。この微笑が大きいほど親しさを表現するものである。日本人は、これと違い親しい人にはエチケット笑いをするが、親しくない知人には真面目な顔で頭を下げる。ニコニコするのは、親しい相手に限られ、特に目上の人には、真面目な顔をして頭を下げることが相手を尊敬したことになるという。

・一方で、日本人は集会では、誰に対してもそこはかとない「エチケット笑いの微笑」を浮かべることが好ましいとされている。日本の「エチケット笑い」とは、以下の意味を持つ。

①自分がみんなと宥和していることを示すためにする。

②日本の美徳である「みんなの和」の表現である。

③自分を目立たせないためにする。

欧米人は、このことを理解していない。

・欧米人は、「エチケット笑い」は、敵意がないことの表れと親近感の現れと理解している。従って、それに反する（声を掛けられた日本人が微笑しながら、逃げ去る）日本人の「エチケット笑い」は不可解と写る。

・欧米人は、電車に乗り遅れたら、悔しそうな身振りをする。日本人は、ヘラヘラと照れ臭そうに笑う。この違い。日本人は失敗を醜態として捉え恥ずかしいことを人に見られたくないために、照れ隠しの笑いをするという。欧米人は、電車に間に合えば、満足の微笑を浮かべるが、日本人はすました顔をする。間に合って、満足の微笑をしたら車中の人から「あんなことで喜ぶなんて、なんて単純な奴だろう」と軽蔑の眼差しで見られると思うからである。

・以上のように欧米人の笑いは、自分の感情と一致しているが、日本人の場合は自分の感情を見せないようにして、相手に敵意がないことを示すという自己防衛のために微笑する。

・人前で微笑するが、家では疲れが出て難しい顔をしているのが日本人の特徴である。

・日本人の笑いには文化が添付されている。その例として以下の例がある。

①生産・豊作への祈願としての笑い（裸の神事などを見て笑う。）

②教育的な意味での笑い（笑い者になるな、水準以上になれ。）

③社会的軽蔑・制裁としての笑い（水準以下であることを笑う。笑かせやがる。もの笑い。）

（この本が書かれた1977年当時と日本人の心情は変化しているのではないか。本質的には変わらないが、相当欧米化してきているのではないだろうか？）

**＜鷲田清一「だれのための仕事」から＞**

著者は、仕事＝労苦、遊び＝安楽というステレオタイプのとらえ方から脱却し、仕事に生きがいや喜びを見出すことができ、遊びにも安楽な遊びではなく深い快楽をもたらす遊びがあるという。また仕事と遊びは互いに入り組んでいるものであるともいう。

現代の都市生活のなかには、「仕事」と「遊び」、「労働」と「余暇」の概念的対比が無意味なシーンが増えてきたという。その背後には、現代の労働の形態と意味がドラスチックに変化している歴史的事情があるという。過去の窮屈な労働観と遊び観はどこから来たのか、私たちが生きることを支えるものは何かを問い、「働く」ことと「遊ぶ」ことの関わりを明らかにし、今後どう変化していく可能性があるのかを考えようとした本である。

・「遊び」を失った仕事

　「遊び」という間を欠いた仕事（work）が、労働（labor）、つまり「労苦」としての近代的労働ではないのか。「手応え」とか「真剣さ」は仕事だけでなく、遊びにも同じように要求される。仕事と遊びは内容的に区別されるものではなく、時間的にも互いに分離されるべきものでもない。同じことをやっていても、労働にもなれば愉しみにもなる。遊びは必ずしも快楽的であるわけではないし、スポーツや勝負事のように、あるいは研究やゲーム制作のように、集中した作業と愉しみとがほとんど区別のつかない仕事＝遊びも数多くある。つまり、出現と消失、緊張と弛緩といった、存在の開閉という運動が遊びの快感をかたちづくっている以上、仕事とはまさにそういう快感を内蔵していなければ、喜びとはなりえないものである。いいかえると、何らかの意味で存在を揺さぶる（刺激の）可能性のない仕事などおよそ生き甲斐とはなりえないということである。そこから、仕事か遊びか、労働か余暇かなどといった二者択一が問題なのではなくて、同じ行為がどういうきっかけで愉しみになり、どういうきっかけで労苦になるのか、その回転軸を見定める必要がでてくる。（P110）

・ときめきのない労働

　フーリエの言葉：ラ・ファランジュ（共同体）で遵守される二つの主要原則。

第一：不愉快な労働があってはならないこと。いっさいの労働は、いつも人々を惹きつけるように組織され、配分され、多種多様なものとならねばならない。

第二：自由な結合に基づいてうち立てられた社会には、いかなる強制も容認されてはならないし、また強制が必要となる理由もないということ。（p112）

・労働社会では、仕事とともに遊びまでが、あらかじめその行路を描き出され、より効率の良いものとなるべく、システム的に社会に包み込まれていくのであった。そういう過程で、人は何がとは特定できないにしても、何かに操作されているという感情から解き放たれないのであった。

労働がくそまじめなものとなり、余暇が快感一色のものとなる。そのように仕事と遊びが両極化されるとき、仕事はすみずみまで、組織化されたガチガチの過程となって「遊び」がなくなり、他方、遊びのほうは個人のプライベートな時間に収束させられて、他人との共同作業がまるで義務のように重荷に感じられるようになってしまう。仕事にも遊びにも、何かときめきといったものがなくなる。

（大草：仕事に遊びが無くなるのは、仕事と遊びが両極化されるときであるが、なぜ両極化されるのか？それは、労働がくそまじめになり、遊びが快感一色になるためという。では、なぜそうなるのか？）

・労働過程が目的と手段との連鎖として設定されているところでは、「すべての目的は、短期間のものであって、必ずその先にある目的のための手段になってしまう。」（大草：means　and　endのことか？）

・労働過程のなかでは、行動としての労働過程はつねに手段とみなされ、それ自体としては「意味をもたない」ということになる。労働の空疎化とはまさにこのことをいうのであろう。手段としての労働は、他の目的のためになされるものとなり、その意味が自己完結してないためにそれ自体に意味のあることでも、私たちに充実感をもたらすものでありえないのだ。（p117）

・仕事をすること自体が楽しいという「仕事の内的な満足」はどこから得ることができるのかについて、著者は以下の理由を挙げている。（p160）

①自己のアイデンティティを他者との関係において見出し、「生きているという手応え」とか「生き甲斐」を感じるから。

②人間は自分を乗り越えようとする「途上にある」意思があり、乗り越えていくところに達成感を感じ喜ぶことができるため。

③人間はホモ・ファーベル（工作人）でもホモ・ルーデンス（遊戯人）でもなくホモ・ヴィアトール（行人、旅する人間、遍歴者）である。そのつどの仕事を人間の行人としてのあり方に思いを至すとき、仕事の「内的な満足」の可能性について思いをはせることができる。その何かに向かっているという感触により、仕事に充実感やときめきを感じるから。（今の自分を超えた別の自分への移行の感覚が重要である。）

④「ともに生きてある」という感覚が仕事のなか、遊びのなかで生成するとき、あるいはまた、私たちそれぞれがそれとの関係で自分をはかる、そういう軸のようなものが、世界のなかで、そして私たちのあいだで生成しつつあると感じられるとき、その感覚である「ときめき」を感じられるから。

・会社に入ればみな、誰にでもできる仕事しかさせてもらえない。それを工夫しながら丹念に繰り返しているうちに自分流のやり方を見つけ、また周囲にも認められるようになる。そうして初めて、他の人にはできない仕事が生まれる。

・人間は、自分が今ここにいることの理由や意味を必要とする。上手く見つかれば「生き甲斐」を感じ、元気が出てくる。意味が見つからないと落ち込むものである。

＜本文の補追から＞

・仕事の意味・働くことの意味として誰もが考えつく2つのこと。

①他の人のために役立つこと。

　→現在は、自分の労働がどこの誰の役に立っているのか見えにくい。そして自分自身を工程の一つの部品のように感じるようになる。

②自己実現できるということ。

　→自分を生かすことのできること。自分にしかできない仕事ができること。

・自己実現は難しい。その理由は、次の2つ。

①自分にしかないもの、例えば素質または才能を生かそうにも、素質や才能は「自分」ではなく「自分の特質」でしかないからである。つまるところ、そういう人は自分以外にもいるわけで、それは自分が属している類型（タイプ）に過ぎないから。だから、「自分がそれをしていることの意味」はそこでは確認できないから。

②仕事は独力ではやりきれないから。どんな小さな仕事でも社会の複雑なネットワークのどこかに位置しないと全うできない。仕事をすればするだけ「他人のお蔭」ということを思い知らされ、自分の仕事を達成したとき「自己実現」などという当初の目標じたいが空しく見えてくるから。

・自分の「目的」ではなく、「限界」にこそ向き合うことになるのが、仕事だということになる。・・・他人の力を借りないと何もできないという社会的条件でもよい。そういう人としての「限界」を感じながら、それでもしなければならないことをしているという感覚がもてたとき、私たちは働いているという実感に満たされることになるのだろう。・・・限界に向き合い、それと格闘すること、そこに仕事の意味がある。仕事に自分の可能性のほうからでなく限界のほうから考えてみることは、仕事の意味を自分のほうからでなく、その仕事が関わる他人のほうから考えてみることと共に、仕事の別のイメージを得るために大切である。

・英語でも「職業」のことをcalling（天職、使命）と呼ぶことがある。他者から求められていることに仕事の意味を見出す考え方である。これは、自己実現とか達成感を求めずにはいられない心情の対極にあるものという。自分から求めるのではなく、他者から求められることに応えていくという立場[[1]](#footnote-1)。・・・現代の仕事も自己の将来像から他者との関係のあり方へと大きく変化してきているのではないかと著者はいう。（p177）・・・働くことの意味とは、一つではなく、その時々において変化して然るべきものという。(p189)

・近代社会のなかで、人々は働くこと、労働や仕事を、価値を生みだすそれ自体が価値のある活動としてとらえてきたし、またそれを通じて人間が、自己の価値を実現する有意味な行為としても労働はとらえられてきたのだが、その価値、その意味を取り戻すはずの言説が、労働でないもののうちにそれらの価値や意味を発見しはじめたからである。（p44）

（大草：労働のなかでなく、余暇のなかに喜びを見出したことを指すと思われる。）

・「経済学・哲学草稿」（カール・マルクス1844年）の一節。「彼の労働は、自発的なものではなくて強いられたものであり、強制労働である。そのため労働は、ある欲求も満足ではなく、労働以外のところで諸欲求を満足させるための手段であるにすぎない。・・・労働者の活動は他人に属しており、それは労働者自身の喪失なのである。（p191注2）

（大草：コメント）

①労働は、本来は、自発的なもので、自己実現を目指し、自分の素質や能力や人間性や人格を顕在化し、楽しみ・喜び・生き甲斐・働き甲斐を感じることができるものである。また、社会的に有益な価値を生む活動であったはずである。現代の労働は、人間疎外のない人間性豊かな自己実現にかなう活動であるといえるかどうか。この労働の本質は、疎外されているのか、疎外されているとしたら何がどう疎外されているのか、今後明らかにする必要がある。

②労働疎外がコンプライアンスに影響を与えるのかどうか。

③労働疎外は、共産主義社会になればなくなると共産主義思想は説くが、正しいかどうか。

**＜武田晴人「仕事と日本人」から＞**

　日本人の仕事観を解説した本である。その一部のみメモした。

・「工場に生きる人々」（中村章　学陽書房1982）に以下の記載がある。

　労働＝仕事は、生計を維持し、同時に自らの社会性を確認するほとんど唯一の機会である

と考えるべきである。

第一に、労働＝仕事は、労働者にとって彼らの人生そのものを意味し、精一杯自分をぶつけ

る対象であってほしいと願い続けているものであること。

第二に、職場はそうした彼らに仕事の場を保障し、自己実現の機会を与えてくれるほとんど唯一の場所だということ。

第三に、職場における日常の苦痛の要点は、必ずしも通常言われているように労働の細分化や単調化などに焦点があるのではなく、むしろ職場での人間関係や自分に対する周囲や上司の評価、あるいは上役の良し悪しによる場合のほうが多いということだった。

・労働者は、労働の場にこそ自己実現があると考え、そこでの人と人との関係が働き手に

とっては主要な意味を持っていると考えている。

・労働と余暇の二分法には反対である。

・一つ一つの仕事には制約があり、主体性を発揮することは難しい。つまり労働の主人と

なるのは難しい。

・労働の報酬は、賃金だけとは限らない。時間かも、達成感かも、責任感かも、ポストか

も、昇進かも知れない。

**＜休憩：インターネットから＞　マルクス哲学における疎外とは何か**

　疎外とは、本来自分のものであるはずのものが、自分から離れてよそよそしくなる現象をいう。もともとはヘーゲル哲学において用いられた哲学用語。ヘーゲルの弟子であるフォイエルバッハにより疎外論が発展され、マルクスが労働疎外論として完成させた。

◎マルクスの指摘した4つの疎外

1．労働生産物からの疎外

本来自分で行った労働の成果は、自分のものであるはずなのに資本家のものとなる。

2. 労働に対するやり甲斐からの疎外

賃金労働制により、本来は人間にとって創造的な活動である労働が歪められ、労働は苦痛で退屈で自由が抑圧されたものとなっている。このような労働には人間性を感じることができない。労働に対するやり甲斐から疎外されている。

3. 類的疎外

人間は類的存在(すなわち、人間は労働を通じて自己を表現することができる動物)であるが、現在の労働はただ苦しいだけである。これは類として疎外されているからである。

4. 人間からの疎外

人間は自分の労働により得られた生産物を他人に与えることにより幸福を感じ、そこに自己実現を覚えるものである。しかし、現在は、貨幣で価値を計るだけの商品を生産しただけであり、幸福を感じ、自己実現を覚えることができない。このことを人間からの疎外といっている。

**＜樺俊雄「現代における人間疎外」から＞**

　疎外には、機械による疎外、組織による疎外、政治や経済による疎外、マスコミによる疎外など種々の疎外がある。それらの疎外の根本にあるのは労働の疎外であると著者はいう。疎外論をはじめて学問的に展開したのは、カール・マルクスの「経済学・哲学草稿」（1844年）であった。これに依拠して疎外論を展開したのが、この本である。

　マルクスは晩年、大工業の発達した「自由の国」においてこそ人間疎外からの回復が見出されると考えていたと著者はいう。しかし、現在の高度経済成長がこのまま進めば、人間疎外は更に深刻化するだろうと著者は考えている。「自由の国」に至る道は、経済成長の連続線上ではなく、社会の変革と人間の自己変革を内容とした断絶の上に成り立つものであるという。労働疎外論は、近代市民社会という特定の社会における特定の条件のもとで成立するものであることに注意を要する。現代社会における疎外については、最後（第三章）に説明がある。

（資本家・労働者の階級対立と独占資本主義）

・マルクスは、社会名目論（個人が実在しその集合としての社会は名目にすぎないとする）や社会実在論（社会が先に実在し、個人は抽象的で存在しないとする）に陥ることなく、個人と社会は相互関係にあるものとして捉えた。そして、個人と社会との相互関係は、人間の物質的生活諸条件によって究極においては決定されるものだとする。従ってマルクスが考えていた個人は、フォイエルバッハ流の「我と汝との共同体」といったような抽象的な社会によって規制されるものではなく、自己が人間として生存するための根本的な物質的生活諸条件によって規制されるものである。・・・社会というのは、人間が生存するために不可欠である生産活動の場において占めるところの生産関係によって基本的に規定されるものだとする。

・マルクスは、また個人と社会との関係を人間と社会的環境との弁証法的相互関係として捉えている。個人と社会との関係を解決するにあたって重要な手がかりを与えてくれるのは、社会的諸関係が所有形態に依存することを強調している。

・マルクスは、疎外を論ずるにあたっては常に生産手段における私的所有の形態を除去すべきことを強調している。EX．人間による人間のための人間的本質の現実的獲得としての共産主義。この共産主義は、…人間と自然との抗争、人間と人間との抗争の・・・個と類との抗争の真の解決である。（「経済学・哲学草稿」p130）

・ヘーゲルは、市民社会を個々人の利己的欲求を充足させる組織であると捉えながらも、個々人の利害を超えて国民全体の福祉と倫理との立場に立つ国家は市民社会を止揚するものだとしている。

　　⇕

マルクスは、国家をこのように抽象的にとらえるのではなく、その物質的基盤がブルジョア階級の利益にあることを見抜いて、国家は市民社会に対立するものと考えた。

・近代市民社会：その生産は、自給自足の封建社会的生産ではなく、一般の消費者の需要を想定して、その需要に応える品物、つまり消費者によって購入される商品の生産であった（商品生産社会）。（自分で必要なものを生産するのと違い、他者が必要とする物資を生産する。これが封建社会と近代市民社会との最大の違いである。）

・マルクスは、商品生産社会について、商品は使用価値と交換価値が備わっていることを指摘した。人間の評価も交換価値を示す貨幣価値で評価する傾向があった。→労働力の商品化

・マルクスは、人間の存在を根本的に規定するものは、それが自己の生存に必要な生活資料を自分の手で生産することにあるという。生産に必要なもろもろの生産手段を所有する資本家と生産手段を奪われて労働力しか所有しない労働者の対立がある。この対立の真の原因は、生産された財の分配にある。

　労働者は労働の報酬として賃金を受け取るが、その賃金に見合う以上の価値を生産する。商品の生産に必要な労働以上の労働を強いられる。労働者はこの必要労働の上に剰余労働をしており、この分が資本家の利潤となる。

・産業革命後、貧困、不健康、不衛生、無気力、疾病その他あらゆる害毒に付きまとわれていた労働者。このような労働者は、このような労働者の搾取状態が続く以上、そういう社会の主導権を握っている資本家階級を打倒するために立ち上がる。その結果、建設される社会は階級対立のない、真に人間が解放される共産主義社会である。

　マルクスは、資本家階級と労働者階級の中間階層も存在すると認めていたが、資本主義経済の進展に伴い、いずれかの階級に属するようになると考えた。経済発展に伴い、この階級対立が激化するのは必然であり、またそれが階級闘争を自ずから生みだすのであるから、資本主義社会における労働者階級による社会変革は必然的だと考えた。

・マルクスは、資本家と労働者との対立が、近代社会の矛盾対立であると考えた。このような矛盾対立の状況におかれている人間は、いわば疎外されているわけなのであって、こういう人間性の喪失の状況、人間の自己疎外の状況について「経済学・哲学草稿」のなかで論究した。マルクスは、生活資料の生産、つまり労働ということが、人間存在の本質的規定だと考え、労働の疎外に重点をおいている。・・・マルクスは、私有制という歴史的条件下におかれた社会における労働を対象にした。（資本は過去の労働の所産が蓄積されることによって生じる。）

（独占資本主義と国家の社会機構）

・マルクスは、プロレタリアの国際的連帯を説き、プロレタリア階級による社会変革の必然性を科学的に論証したという。（大草：本当か？）

・マルクスが見てきた資本主義は、一層発展し、自国から世界へと侵略する帝国主義へと変わっていく。資本主義経済は不均等に発展し、それぞれの独占資本が互いに競争し合い、独占資本主義相互の間に衝突が生じる。そういう独占資本主義相互の衝突が第一次および第二次世界大戦を惹き起こした。そういう帝国主義段階におけるマルクス主義の新しい研究に成功したのがレーニンであった。レーニンに指導された1917年10月のロシア革命が最初に成功したプロレタリア革命であった。

・アメリカには強大な独占資本主義が形成されていった。資本主義としては危機を乗り越えるためには、社会主義に向かうか、ファシズムへ向かうかのいずれかの道しかないため、アメリカは第3期の危機を迎えて再びファシズム的政治機構を持ち始めた。

・このようにしてアメリカは、戦後まもなく政治機構上はファシズムへ向かい、国際経済上では帝国主義的侵略政策をとるようになった。（例えばベトナム戦争）

・このように帝国主義は侵略により残虐と暴行を行ったにもかかわらず、表面上はいつも平和だとか正義だと言う美辞麗句の標語を掲げている。帝国主義の残虐と暴行との事実を知らない人々は、帝国主義的侵略を侵略と考えない。むしろ帝国主義的侵略をおおい隠すために表面に現れている経済的進歩に人々は目を奪われがちである。しかも、その経済的進歩は科学技術の高度の発達を伴っているから、その科学技術の性能に驚嘆するだけにとどまって、科学技術が組み込まれている社会機構の本質には、人々はあまり注意しない。

・・・科学技術の向上は、ブルーカラーに代わって、ホワイトカラーの増加をもたらした。そのホワイトカラーの上中の階層のものは、従来の旧中産階級に対して新中産階級と呼ばれることがある。この新中産階級は労働力を商品化して生存する限り、広義の労働者階級に属するにもかかわらず、その多くの者は労働者としての階級意識を持っていない。

→資本主義はマルクスが批判的研究をした当時とは異なった異質なものになったと考える論者もいる。

→著者は、労働力の商品化という基本的な事実が変わっていない以上、社会は独占資本主義下においても根本的には変わったことにはならないと主張している。

（大草：ホワイトカラーは、資本の一部の私的所有もしているので新中産階級と言えるのでは。私的所有を考えるべきではないか？）

・さらに著者は以下のようにいう。独占資本主義国家においては、新中産階級が労働者としての階級意識を持たないような社会機構が作り出されているだけでなく、資本主義の本質を見抜いた労働者や市民が立ち上がって反抗する余地がないほど、この社会は完全に装備され、管理されている。つまり、独裁主義国家においては国家的政治権力と経済権力とか完全に癒着している。また労働者や市民が国家権力に反抗するのを抑圧するための警察力や軍事力がある。法律制度や教育制度も国民を支配するための社会機構の1つとなっている。

（大草：コメント）

①マルクスは、労働者は労働力を商品化することによってのみ生存しうるという。プロレタリア階級は新たな桎梏の苦しみ(貧困、疾病、悲惨、苦痛等々）に悩んでいるという。労働力を商品化することがなぜ労働の疎外につながるのか？

②商業資本家→産業資本家→金融資本家?　当初、ブルジョワは中産階級の地位にあった。産業資本家といっても中産階級であり、上に封建的残存勢力である貴族、僧侶などの特権階級が存在していた。

③貴族、僧侶、ブルジョア、労働者(プロレタリア)の４階級。なぜ科学的な歴史段階の認識通りに事が進まなかったのか。共産主義社会が成立したものの、理想的なものとはかけ離れ、共産主義国家内でも同様の桎梏の苦しみを味わう労働者がいる(貧困、疾病、悲惨、苦痛等々 + 言論統制、移動の不自由）のはなぜか?

（疎外された労働の放棄）

・マルクスは、「プロレタリアが人格として自己を主張するためには、労働を廃棄しなければならない、…彼らプロレタリアは、社会の諸個人が今まで自分たちに1つの全体的表現を与えるためにとった形態、そのうち国家に対してはまともに対立しており、そして自己の人格性を貫くためには国家を打ち倒さなければならない」という。ここでマルクスが廃棄すべき労働といっているのは、これまでのプロレタリア階級の生存条件であったところの労働、つまり疎外された労働であることに注意しないといけない。

（第三章　現代における疎外の問題）

（疎外論）

・疎外論はマルクスの「経済学、哲学草稿」において初めて展開された。20世紀の現代の資本主義経済は、独占資本、カルテル、トラスト、国際化、帝国主義、第三次産業、大都市、生活水準向上、ホワイトカラーの出現と増加、ロボット活用などが特徴で疎外は労働だけでなく余暇にも及ぶ。19世紀資本主義経済は、小規模資本、国内、第二次産業中心、都市、工場とスラム街、貧しい労働者などが特徴で疎外は労働の疎外が中心であった。

（開放社会論）

・エリートと大衆という社会構成が登場し、19世紀の階級対立の資本主義とは異なる開放社会が成立したとする見解がある。著者は、階級対立の基本は変わっておらず、この開放社会成立という見解は、対立を追放する点において論点の逸脱があるとしている。

・現代社会は開放社会であり、階級対立社会ではないとするポッパーに代表される見解がある。この見解では、継続的な社会変動のことを「永続革命」と呼ぶ。これは、プロレタリア革命論を否定するものであり、アメリカの社会学者の使用する「社会変動」と同じである。

・ホワイトカラーは新中間層の代表であり、知識・技能に優れるため、組織の中で発言権を持つようになるに従って、労働者階級に属する意識を失ってしまう。彼らは、労働者とは、工場その他で生産に直接・間接に従事する人間だけを指し、自分たちとは違うと考えている。著者は、この考え方に大きな問題があるという。新中間層も、労働者とは自己の労働力を商品として売り渡す人間という定義に従えば、労働者に属するという。これは、現在の秩序を維持しようとする保守勢力の立場に組するものであるという。

・マルクスは、中間層は経済の進展により、労働者か資本家のいずれかに収斂されると説いたが、旧中産階級や新中産階級は依然として存在している。よってマルクスの説は間違っていたとする説が有力である。社会学で主張されている開放社会論はこの立場である。

（大草：マルクスの予言通りになっていない現実は、マルクス主義の一部破綻と見てよいと思う。階級構成が変わったのであり、すべての独占資本主義が同じとは限らない。時代、社会構造、国によって独占資本主義の内容は違っていると思う。）

（独占資本主義下の大衆社会は階級対立の隠蔽）

・独占資本主義下においては、大衆社会状況が見られるのは事実である。多くの大衆社会論者によると、今日の資本主義社会が大衆社会という名のもとに、19世紀までの資本主義社会とは根本的に異質的なものであるかのように説明されるが、これは誤っているという。本質は変わっていない。今日は大衆社会状況下で、資本主義の矛盾が今日は巧みに隠蔽されているだけのことである。そういう隠蔽されている矛盾を科学的分析により暴露して明るみに出すことこそ、社会科学の使命であるはずであるという。

・一方においては、大衆は蔑視されるべき存在でありながら、それと同時に大衆のなかからエリートが選び出される可能性があると強調する大衆社会論は、階級対立の事実を隠蔽するのに役立つばかりでなく、階級対立の壁を突き破って階級闘争に立ち上がろうとする労働者階級を懐柔するのに役立っている。こういう大衆社会論が開放社会論と結びつき、さらに新中産階級の台頭の強調と結びつくとき、プロレタリア革命論が時代遅れであるというような議論が飛び出してくる。

・今日の支配階級は、労働者が疎外を意識し、生活に不満を抱くとしても、それらを緩和するための種々の手段を有している。以下はその事例。

①労働疎外や生活の不満も産業社会がさらに飛躍的に発達するならば、いずれ解消されるものだと説く。

②未来学は人々の心に未来への希望を持たせることが不満の低減に役立つという。生産の上昇と国民総所得の増大は、国民に明るい未来への展望を約束させるのに役立っている。未来がよくても、今日の疎外や不満の解消にはならない。

③技術革命、科学技術革命、情報革命、コンピューター革命と言うようなことも、支配階級の労働者懐柔に役立っている。

④余暇の楽しみに人々の心を向けるようにする。

(疎外からの脱出の困難さ）

・現代の高度産業社会では、疎外は単に労働の疎外としてのみ現れてくるのではなく、余暇の疎外としても現れてくる。（余暇をとるためには、目的地に行く交通機関の混雑があり、費用もかかるため、余暇を支障なく楽しむことができない。）

・疎外の根源は労働の疎外にあるのだし、労働の疎外は単に機械や技術の進歩では解消できないものである。労働の疎外を惹き起こすのは、マルクスも認めているように私有制と言う社会制度が根本的条件となる。したがって機械技術の飛躍的な進歩が行われたとしても、それだけで直ちに人間疎外が解消されることにはならない。むしろ、私有制を前提とする社会体制のもとでは、経済の発達は、疎外状況をいっそう深刻なものにする。

・疎外からの脱却の道をテクノロジーの発達に求めることはできない。疎外からの完全な脱却はマルクスが説いたような将来の共産主義社会を達成する以外に道がないことになる。資本主義社会における疎外状況から脱却する道は、そうだとすると、まず社会主義社会の建設に向かって社会革命を行うことにある。ところが、現在の独占資本主義下における高度産業社会においては、社会変革を目標とする前衛政党が存在するにもかかわらず、革命運動が準備され、実践に移されるのは非常に困難な状況におかれている。というのは、こういう高度産業社会は独占資本と国家権力とを癒着させることによって、強力な国家権力を作り上げているからである。

・・・軍隊、警察力、法秩序、裁判所等が、国家権力に反抗する勢力を抑えるだけの力を持ち、現存の社会体制を維持する諸制度があるためであるという。

・・・工場や会社、官庁、大学、組合等においても法秩序の維持の名のもとに、人間は完全に制御される仕組みになっている。

・・・高度産業社会の個人に対する抑圧の仕方はある意味で暴力であるという。そしてこの暴力は法律により守られているという。社会全般が国家権力によって完全に制御されるようになってくると、反対運動の推進力となるべき革新政党までもが体制の枠組に組入れられてしまう恐れが生じる。

・高度産業社会において、疎外を意識し、不満を持つ人々にとっては、捌け口はほとんどない。政策への反対意思を表明しようとしても議会制度の下では簡単にとっさに表明することはできない。デモも警察力の規制の下では完全な効果は上がらないという。

・フランス共産党はアルジェリアの独立運動に対して、国家権力と共同して反対行動をとったという例もあった。

（マルクーゼのニューレフト思想と労働観）

・マルクーゼは、疎外から脱却する可能性を示している。生産が完全にオートメーション化され、自由を求める激しい要求が強まっている高度産業社会におけるニューレフトの人々の思想と運動がその鍵を握っているという。今日、国家権力に抵抗して戦っているのは、労働者階級ではなく、インテリゲンチャ、市民運動グループ、青年たち、ヒッピーなどである。一見民主主義的であるが権威主義的に運営されている社会は「一次元的社会」と呼ばれるべきという。この「一次元的社会」の特徴は、被支配階層を統合していることであるという。この社会において、不満のある人々の力は強力な力とはならない。国家権力への抵抗運動はアウトサイダー(例えば米国の黒人人権運動)と特権階層で変革意欲を持つ技術者、専門家、学者などと学生たちであるという。このようなマルクーゼの考え方は、ニューレフトの思想の1つであり、マルクス主義とは異なるという。しかしマルクーゼは一方でマルクス主義の「革命の社会的担い手というものは、革命の進行過程そのもののなかで形成される」と言う見解を認めている。このためマルクーゼは、黒人暴動や学生反乱等の抵抗運動が発展し、一般大衆の抵抗運動にまで拡大された暁に真の革命運動が起きると考えているのかも知れない。だが、マルクーゼはもう片方では、マルクス主義の科学的社会主義というものを真っ向から否定している。彼は、「ユートピアから科学へ」というエンゲルスに対し、「科学からユートピアへ」を主張する。彼によるとユートピアという概念は不可能と思われる社会変革を計画することを意味しているという。

・マルクーゼは、貧困や悲惨の克服、疎外された労働の廃棄、過剰抑圧からの解放等は全て可能だという。ここでマルクーゼのいう「疎外された労働の廃棄」とは、労働が全面的に廃棄されるものではなく、労働が同時に遊びでもあるような状態になることを指しているという。マルクーゼは、自由な社会としての社会主義社会は労働を量の面だけではなく、同時に質の面においても考えられるべきだという。そこから、労働と遊びとの一致という将来社会の理想が出てくるという。この理想は、フーリエの空想的社会主義においても説かれていたものであるという。

・著者は、マルクーゼの主張はマルクス主義によってすぐ否定され論駁された空想的社会主義の枠内にとどまっているという。

・マルクーゼの説く将来社会とは、各人の遊びとしての労働によってオートメーション化された生産装置をフル稼働させ、超高度に生産力の発展した社会である。彼はテクノクラシーを否定しながらも、その肯定論者となっている。労働の疎外そのものが、機械や技術から直接ひき起こされるものではなくて、それらの背後にある社会体制こそがその根源がある。マルクーゼの考えは、一種のテクノクラシーの幻想であるという。

・著者は、マルクーゼは、労働と遊びとの統一としての人間活動を考えるようなユートピアを主張したり、将来社会を建設するのに労働者階級を除外した、民族的少数者やインテリゲンチャや学生などに革命の担い手を託するような非科学的な社会主義を説いており、それでは問題解決にならないと強力に批判している。

(大草：著者はマルクス主義の原理主義者のような考え方をしているのではないか？また、著者の生きた時代の社会基盤の影響を受けていると思われる。)

（「全体的人間」の労働とマルクーゼ、マルクスの理想とする労働）

・近代のブルジョワ階級が台頭し始めた時期にエンゲルスが「全体的人間」と呼んだ人々が生まれている。「全体的人間」とは「思考力、情熱、性格における巨人」「多芸と博学における巨人」など探検や発明で後世に名声を残した「自由な独創的創造力を持ち、明朗にして磊落な性格」の持ち主とのこと。そのような「全体的人間」も資本主義の台頭とともに特権を失い、ブルジョア的性格の人間がそれにとって変わった。

・高度産業社会においては、経済恐慌や失業者の増大や社会不安等等の諸問題を解消するために、経済の計画化を行ったり、消費を増大させようとして戦争を惹起させたりする。そういう経済統制を行うため、巨大な独占資本を中心として、それに国家権力が結合した形での独占資本主義の強化が行われる。かくして、独占主義は国家独占資本主義の形をとり、独占資本と国家権力との完全な癒着したものが現れる。(国家独占資本主義の誕生）

・国家権力は、大衆を無気力にさせ、自主性を持たせないために、マスメディアを自由に左右し、そのことによりイデオロギー的に事態の隠蔽をはかる。

・大工業が少数の労働者により生産されるようになると、失業者が増える。この大工業の労働者と失業者は、自分たちの能力と価値を自覚し、同時に自分たちのおかれている疎外状況を意識することで階級意識が高まり、社会変革への意思が強くなるという。「一つの社会構成体は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しないうちは崩壊することは決してなく、また新しいより高度の生産関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化し終わるまでは、古いものにとって変わることは決してない。」とマルクスは言っている。発達した大工業をもつ社会は、まさにそのような社会変革の条件を具えていると著者はいう。

・共産主義体制下における大工業においては、人間が生産過程に含まれたものとして現れていることはなく、人間が生産過程そのものに対して監視者並びに規制者として関係する。・・・もはや人間は機械の奴隷ではなく、むしろ機械の主人となる。そして(労働疎外から脱却し)労働時間は短縮される。労働から解放された余暇時間のなかで、人々は人格の向上に必要な学習や研究、ことに科学教育や技術教育、あるいは芸術教育を求める。それによって人間は自己の独創的創造力を自由に伸ばすことができ、そのことによって「全体的人間」となる可能性が与えられるという。

・資本主義体制下では人間の疎外がますます深まるとともに、社会主義はますます深刻になる。他方、社会主義体制の下では、疎外から脱却した人間が個性を回復し、自己の独創的創造力を豊かにすることによって、自己を全体的人間として形成する可能性を与えられ、その結果として大工業の発展は限りなく進んでいくと著者はいう。

・マルクスは、「経済学批判要綱」において、「経済学・哲学草稿」では、単に疎外を止揚した共産主義として抽象的にしか書かれなかったものが、具体的に書かれている。つまり労働時間を余暇時間との対立が止揚された形での人間の生活を描いている。余暇時間において、科学教育、技術教育、芸術教育等の高度の活動を行って、独創的創造力を深めた人間が、労働時間のなかで自己の能力を発揮させるのである。だから、その場合の労働はもはや強制労働のようなものではなく、自分の意のままに自分の創造力を発揮するような形での労働である。

・マルクーゼは、労働と遊びとの結合した形での労働を未来の労働として考えているが、実はマルクスも既にそれに近い形での労働を考えていたことがこの文章によってもわかる。ただし、それはフーリエ流のユートピアとしてではなく、現在の資本主義経済の批判的な科学的分析の結果として得られた結論である。

(大草：コメント)

①共産主義体制下になると労働の疎外が解消されるというのは幻想ではないか。

②労働と遊びを結合した仕事を未来の労働として考えたマルクーゼと同様の形の労働を

考えていたマルクスとの共通性に驚かされた。

③新中間層の増加で資本家対労働者という対立関係の階級闘争は、なくなってきているのではないか。

④コンプライアンスと労働疎外との関係は？

・高度産業社会の企業に働く労働者は、常に疎外の状況におかれているが、このことがコンプライアンスとどのように関係しているのか?

・労働への不満、抑鬱感…これは疎外によるものか?環境や人間関係等によるものか？

・疎外は社会体制と企業に原因があるのか？

・自分の労働は搾取されている→搾取されている分を取り戻すことが正当との理由付け→こんなに苦労しているのだから、このくらい貰ってもいいだろう。

・不正のトライアングル（正当化、機会、動機）

⑤社会主義国、中国、旧ソ連でも腐敗政治、汚職等の多発→社会主義、共産主義になっても不正、コンプライアンス違反は相変わらず多く、無くならないのはなぜか？人間の心に問題がありはしないか？（財貨の不足、知足なき欲望や煩悩具足の人間の存在）

以上

1. V.Eフランクルも同様のことを言っている。その仕事の目的を問うのではなく、自分に期待された仕事をやっていくことが大切ということ。「それでも人生にイエスと言う」（山田邦男・松田美佳訳春秋社p27）参照。 [↑](#footnote-ref-1)